

『古代アメリカ』2, 1999, pp. 83-86

<コメント>

交易と古代マヤ都市のあり方

—青山 1998論文に対するコメント—

杓谷茂樹
(総合研究大学院大学)

最近の青山和夫氏の活躍には目を見張るものがある。本論文のような研究の最先端を示す学術論文のみならず、猪俣健氏との共著による概説書、J. サブロフ博士の著作の翻訳など一般の読者に向けた日本語の著作は、人間でいえば未だよちよち歩きを始めたばかりの日本における古代マヤ研究の裾野を広げる上で大きな貢献をなすものとして高く評価できる。

青山の研究の礎は中米ホンジュラスのラ・エントラーダ考古学プロジェクトとコパン・アクロポリス・プロジェクトという2つの調査への参加によって築かれたものであり、そこから同氏の博士論文をはじめとする諸論文が生まれたのであるが、本論文はそのエッセンスであるといえる。

本論文において青山は主にコパンで出土した黒曜石遺物の定量的な考察を通して、地域内交換と遠距離交換のあり方を復元している。このうち地域内交換に関する考察については、まさに青山考古学の真骨頂といえる。かつてラ・エントラーダ考古学プロジェクトで行った東南マヤ地域の黒曜石の移動ルートの詳細な復元 [Aoyama 1991]も今回のコパン谷を中心とした地域内交換の復元も、コパンのように遺跡中心部のみならずその周辺部も網羅した広域調査が実施された例の少ない現在の古代マヤ研究において、ほとんど唯一といつてもいい重要な知見を我々に与えてくれるものであり、世界的に評価されてよいであろう。

一方、遠距離交換に関してはやや違和感を感じる。青山がここで言う遠距離交換とはメキシコ中央高原産の黒曜石がコパンで出土する事例を指している。特に古典期中期については、この問題はテオティワカン的な文化要素がマヤ地域に出現するという事象に関する古代マヤ研究における一大テーマに関わるものであり、因みにこの古典期中期という時期区分も元来この事象に関する議論の中から設定されたものである[cf. Pasztory, ed. 1978]。

テオティワカン的な文化要素は、アルトゥン・ハのような例を除けば、4世紀始めごろ (Manik 2期) にはティカルで本格的にみられるようになり、同地の巻き鼻王 (西暦379年即位) などは自らの権威を誇示するために積極的にテオティワカン的な要素を利用している。そして5世紀前半になってそれはカミナルフユなどマヤ地域各地に普及してゆく[杓谷 1995: 22-23]。コパンのヤシュ・クック・モ王の即位は西暦426年のことであり、黒曜石遺物全体に占める縁のものの割合の高さ、円筒型三脚土器の存在、この時期の建造物にみられるタルー・タブレロ様式など、まさにマヤ地域に広がった、王権の誇示にテオティワカン的な要素を用いる風潮がコパンでも取り入れられていることを示している。ただし、この考え方とともに青山があげている「ヤシュ・クック・モ王がテオティワカン出身、あるいは、カミナルフユやティカルのようなテオティワカンと直接的な関係を持ったセンター出身であった」(p. 26) という説については、かつてコギンスがティカルの巻き鼻王について同様の意見を提出したこと思い出させるが[Coggins 1976: 140-145]、よっぽどしっかりとした証

拠を提示しない限り言及すべきではないと考える。

また、青山は「ヤシュ・クック・モ王が、緑色黒曜石製石器を、パチューカの近くに位置したテオティワカンから直接、獲得した蓋然性が高い」(p. 27)、「コパンの初期の王たちは、自らの社会的地位を正当化し、権威・権力を強化するために、当時新大陸で最大の都市であったテオティワカンとの直接交流を利用したと推測される」(p. 29)といった記述を行っているが、他の都市よりも緑の黒曜石の割合が高い遺構があったからといって、はたしてこれを「直接獲得した」とか「直接交流」していたと言いきれるのであろうか。G. ヴェイルがまとめたところによると、この時期のティカルはもちろんエズナ、ベカン、エル・ミラドール等、他のマヤ遺跡でもパチューカ産の緑の黒曜石をかなり高い割合で出土している[Vail 1988: Table 4]。これらの都市がそれぞれテオティワカンから直接緑の黒曜石を獲得していたとは現時点では考えにくい。当時のマヤ地域では黒曜石だけではなく、翡翠、カカオ、ケツアルの羽根、ジャガーの皮といった貴重品や塩、土器、布地、染料などの生活物資が交易され、各都市は互いに不足を補いあっていった。むしろ緑の黒曜石はマヤ地域に存在していたこの交易網にどこかで合流して流通し、その価値の高さゆえに権力、財力のある人物のもとに落ち着いたと考えた方が自然であろう。

そうなると、青山が本論文で触れていないマヤ地域内の交換についても考慮する必要が出てくる。青山はコパンにおける「イシュテペケ産黒曜石製石刃などの生産規模は、他地域への輸出を示唆するような大規模なものではなかった」(p. 30)と分析しているが、実際には広くマヤ地域全体でイシュテペケ産の黒曜石はエル・チャヤルに次ぐ量が流通しており、コパン以外でイシュテペケ産の黒曜石を大量に流通させることのできた存在が考えられない以上、コパンがマヤ地域内交換のための財源としてイシュテペケ産の黒曜石を利用していたと考えても何らおかしくはない。このマヤ地域内交換網こそ、都市国家間の交流を促進し、物資の交換はいうまでもなく、情報までもが交換されることにより宗教、文字、暦といった文化要素をマヤの各都市に共有せしめ、その結果「マヤ文化」が長期にわたって存続したのであり、決して軽視すべきものではないと考える。

ところで、青山が分析対象としている黒曜石は、その成分を分析することにより産地が同定できるという特徴から、古代の交易について考える際に非常に有効なものとして考古学研究の一つの流れを形成してきたことはいうまでもない。本論文で青山は交易ルートの復元といった伝統的な研究にとどまらず、「古代メソアメリカの複合社会や都市の形成・発展過程における交換の性格と役割」、そしてそこから更に一步踏み込んで、人類学の分野から導入された理論を援用して最近盛んに展開されている「古代メソアメリカの都市の性格」に関する議論に参入することに意欲を見せている。人類学において王の権力の基盤を巡っての議論には経済決定論、功利主義などの立場に対する意味、観念、イデオロギーを重視する立場という対立がある[cf. 関本 1987: 30-31]。本論文において青山は「古代マヤ国家による経済活動の統御やその権力基盤に関する仮説を検証する」(p. 29)こと念頭におき、前者の立場に立つことを明確にするとともに、サンダースやデマレスト等が引いている後者のタンバイアやギアツの議論の行き過ぎを正そうとしている。しかしこういった青山の古典期マヤ都市の「政治的・経済的側面」を重視する主張は、いくらメキシコからもたらされた緑の黒曜石が象徴的な意味合いが非常に強いとはいえども、黒曜石を扱い、それが移動することを手がかりに考察する限り当然の帰結といえ、見事な黒曜石遺物の分析に対し、議論にはもうひと捻りが欲しい感じがする。その上、本論文においては、社会・政治・経済組織の変化過程の復元を、黒曜石のさまざまな分析方法を用いて実施し、それを「セトルメント・パターン、建築様式、図像資料、文字資料といった他のデータによって復元された人口や政治組織の変化と関連させて考察する」(p. 4)としているが、それらのデータが黒曜石の分析ではカバーしきれない部分を補完する形

にはなっておらず、概ね黒曜石から導き出された仮説を傍証するためにしか使われていない印象を持つが、そこにもやや物足りなさを感じる。

しかし、青山の主張は主張として、あの誇り高いマヤの人々が、ただ物につられて特定の支配者になびいたとは私にはどうしても考えられない。黒曜石の流通などの経済活動が国家の権力と密接に結び付いていたことには疑う余地はないが、同時に古典期マヤ国家の権力基盤に宗教が重要な位置を占めていたことは青山も認めている。やはり古典期マヤの王の権力の形成、維持に関しては、ある一側面を重視して考えるようなものではなく、さまざまな要素が絡み合う社会過程として捉えるべきではないであろうか。本論文における議論が古典期マヤ国家において王に求心力を持たせる働きをしている宗教・イデオロギー的要素と政治・経済的要素がどのように絡み合い、その統治機構を形成し維持していたのかという議論に今後発展してゆくことを期待する。

註

- 1) 本文は青山和夫氏の論文、「交換、複合社会、古代マヤ都市－先コロンブス期マヤにおける打製石器の通時的研究」、『古代アメリカ』創刊号、pp. 3-40、古代アメリカ研究会、1998年にに対するコメントである。

文 献

Aoyama, Kazuo

- 1991 "Lítica". In *Investigaciones Arqueológicas en la Región de La Entrada*, Vol. 2, edited by Seiichi Nakamura, Kazuo Aoyama and Eiji Uratsuji, pp. 39-204, Instituto Hondureño de Antropología e Historia, Servicio de Voluntarios Japoneses para la Cooperación con el Extranjero, San Pedro Sula, Honduras.

Coggins, Clemency C.

- 1976 Painting and Drawing Styles at Tikal: An Historical and Iconographic Reconstruction. Ph.D. Dissertation, Harvard University.

Pasztori, Esther, ed.

- 1978 *Middle Classic Mesoamerica: A.D. 400-700*. Columbia University Press, New York.

杓谷茂樹

- 1995 「嵐の空と雨の神：古典期マヤにおけるテオティワカンの影響」、『中南米考古学研究会会誌』第5号、pp. 21-30、中南米考古学研究会

関本照夫

- 1987 「東南アジア的王権の構造」、伊藤亜人、関本照夫、船曳建夫編『現代の社会人類学3、国家と文明への過程』、pp. 3-34、東京大学出版会

Vail, Gabrielle

- 1988 *The Archaeology of Coastal Belize*. BAR International Series 463, Oxford.

